

論文審査の結果の要旨

本論文は、朝鮮王朝における代表的儒学者（朱子学者）である李退溪（名は滉、1501～1570）の哲学思想の特質について分析を行うと共に、江戸期の朱子学者である山崎闇斎及びその学派の人々に対して与えた影響について考察を行ったものである。

李退溪は中国から伝えられた朱子学を深く体認・究明した学者として、また清廉篤実な士人としての生き方、さらには優れた教育者としての姿などが、同時代から後世に至る人々の崇敬を集め、今日にまで至っていると言えるが、彼の哲学思想の内容に関して必ずしも統一の見解が示されているわけではない。論者は、李退溪の膨大な編著書、及びその門人や後世の人々の手になる文献資料を渉猟し、精密に読解分析することによって、その哲学思想に対する解明を一歩進めようとした。

本論文は、序論、本論四章、結論からなるが、本論の第一章～第三章において、李退溪の哲学思想の解明を、同第四章において、崎門学派に与えた影響の分析を行っている。退溪思想の解明に当たっては、無極太極論（存在論）、四端七情論（性情論）、主敬・格致・知行論（修養実践論）を取り上げて論じている。その結果、退溪の無極太極論には理気妙合の性格に特色が見られること、四端七情論の「理発」と「気発」の「発」は理と気を同時に取り上げて論じるべきであることなどを明らかにしている。また修養実践論においても、静敬各進説、敬が伴う格致論、知行各進論などにその特色があることを提示している。さらに、崎門学派に与えた影響に関しては、山崎闇斎から始まって幕末の楠本端山・碩水に至るまで、個々の学者の発言を分析した上で、彼らの退溪学に対する高い評価と同時に、異なっている点も明らかにし、是々非々が明確に示されていたと結論付けている。

李退溪思想に関しては、韓国を中心に、日本や近年では中国や台湾の研究者によって多くの研究がなされてきたが、本論文はこれらの研究を幅広く吸収検討した上で再考察を行い、従来の研究に見られない新たな知見も得られており、その成果は大いに評価できる。また、退溪学が江戸期の日本儒学に与えた影響に関しては、阿部吉雄氏の先駆的研究以降、全体にわたって、しかも退溪思想の内実をめぐる議論について具体的に取り上げ分析した研究はほとんどなく、少なくとも江戸儒学思想史研究におけるこの問題を再提示した意味は大きい。

本論文には、李退溪が生きた時代の社会的状況と彼の哲学思想との関係はどのようであったか、朝鮮朱子学の独自性を生んだものは何であったか、また崎門学派が特に李退溪思想を評価したのはなぜだったのか、などに関して、今後更に究明すべき問題がいくつか残されている。しかし、今日の日本における朝鮮儒学史研究や江戸儒学史研究において、李退溪思想をめぐる問題が必ずしも十分に取り上げられ議論されていない状況を考えると、本論文の意義は決して小さくないと言える。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。